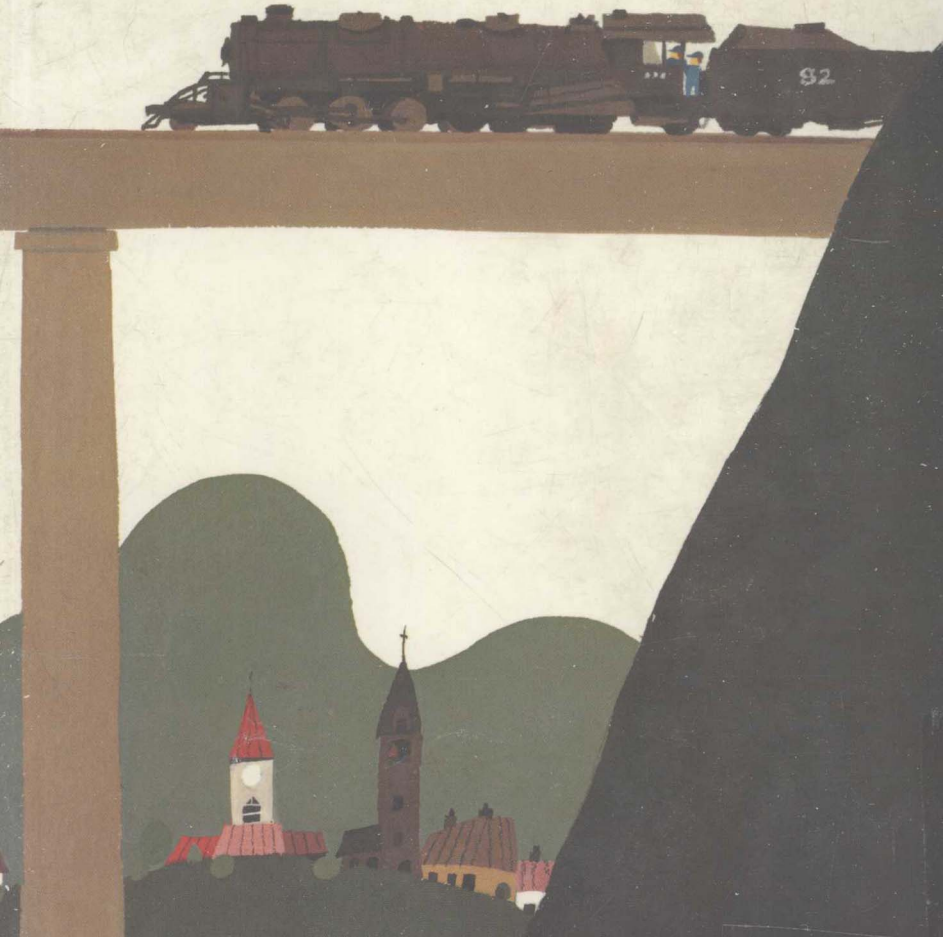
南蛮阿房第2列車

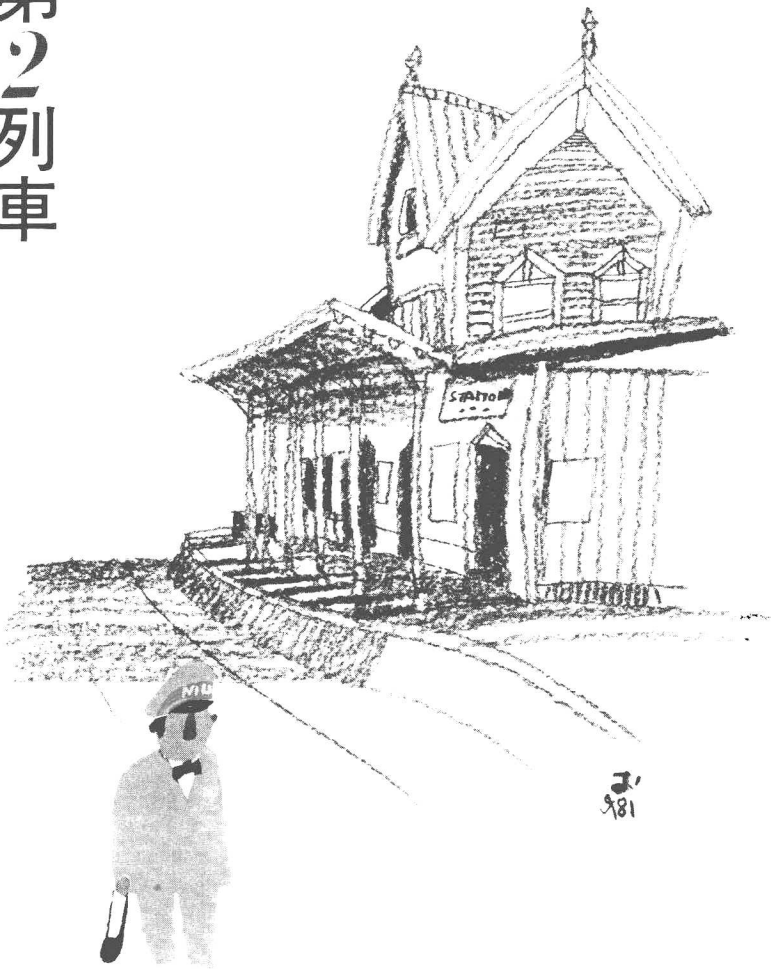
阿川弘之



新潮社

蛮阿房第2列車

川弘之



南蛮阿房第2列車
定価九八〇円

昭和五十六年十二月　五　日印刷
昭和五十六年十二月　十　日発行

著　者　阿川弘之
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七十一番地
電話　東京(266)五一一一(業務)
東京(266)五四一一(編集)
振替　東京　四一八〇八　〒一六二

印刷　株式会社　金羊社
製本　大口製本株式会社

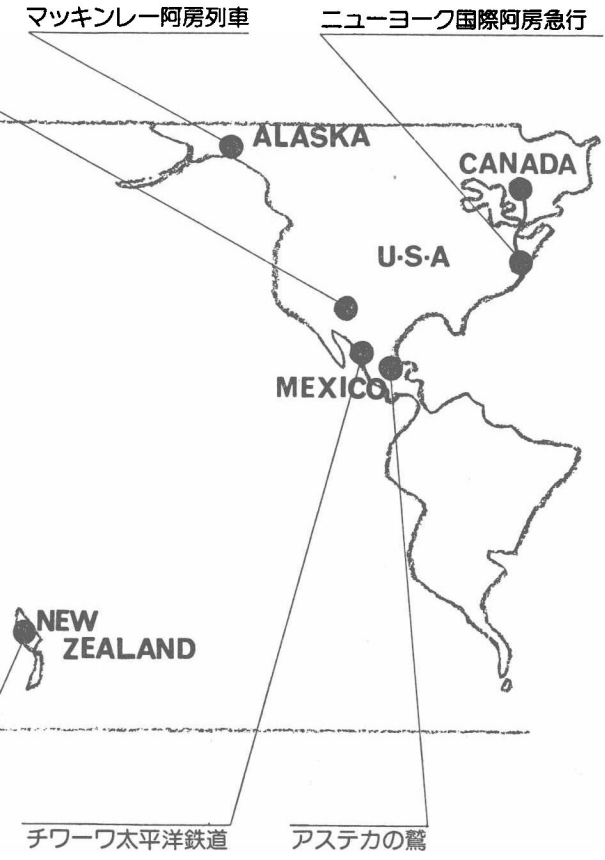
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan. 1981

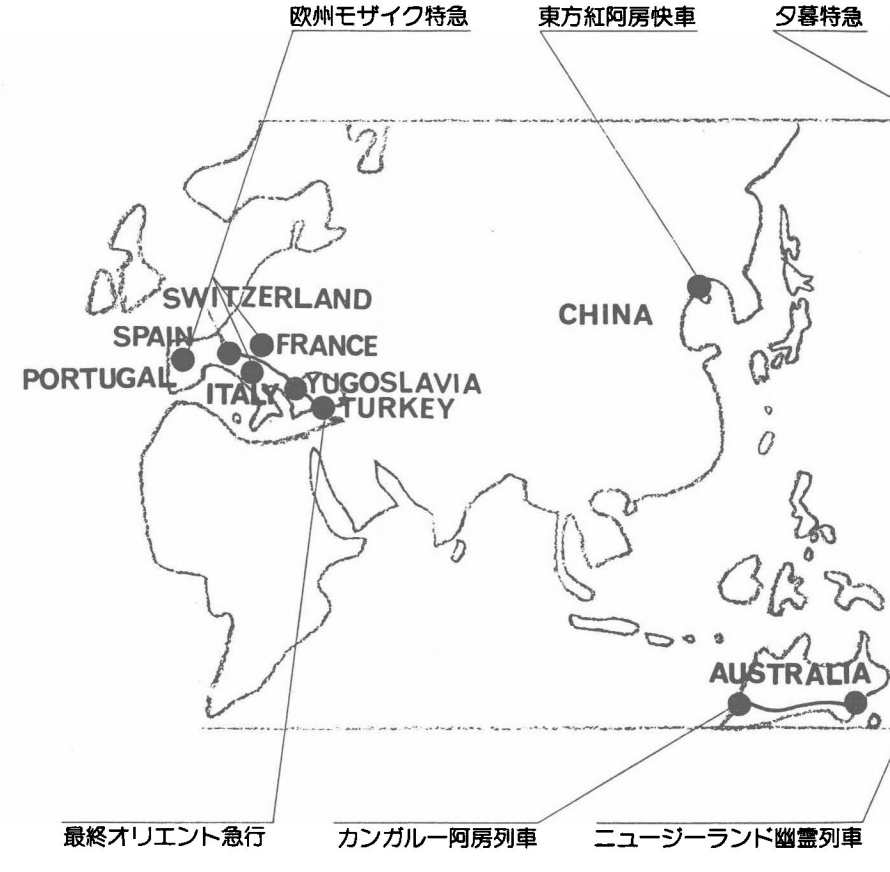
南蛮阿房第2列車

目次

最終オリエント急行 7
カンガルー阿房列車 25
ニュージーランド幽霊列車 49
東方紅阿房快車 71
マッキンレー阿房列車 93
ニューヨーク国際阿房急行 119
夕暮特急 145
アステカの鷲 165
チワーワ太平洋鉄道 187
欧州モザイク特急 203



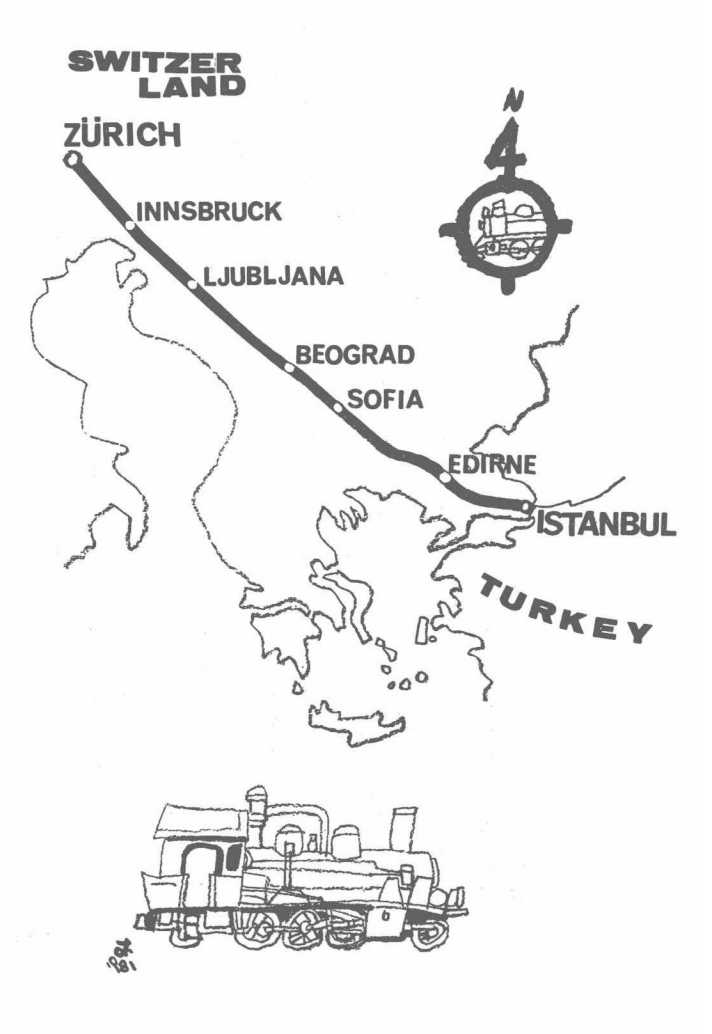
试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co


欧州モザイク特急
東方紅阿房快車
夕暮特急
SWITZERLAND
SPAIN
FRANCE
PORTUGAL
ITALY
YUGOSLAVIA
TURKEY
CHINA
AUSTRALIA
最終オリエント急行
カンガルー阿房列車
ニュージーランド幽霊列車

装幀・挿画　おおば比呂司

南蛮阿房第2列車

最終オリエント急行


SWITZER LAND
ZÜRICH
INNSBRUCK
LJUBLJANA
BEOGRAD
SOFIA
EDIRNE
ISTANBUL
TURKEY
N

「御存じでしょうが、オリエント急行がいよいよ廃止になります」
と、突然の電話が掛って来た。実はこれを機会に、うちで「オリエント・エクスプレス」の特集をやることになりまして、どうでしょう、乗ってごらんになる気はありませんか。——行って下さるなら、旅費は当方で負担しますがと言う。
耳よりな話と思ったろうと、人が思うのは御勝手だが、私は思わなかった。
「君、オリエント急行がなぜ廃止になるか知ってるんですか」
昔の「オリエント・エクスプレス」は確かに豪華な列車でした。詩人も音楽家も、ヨーロッパの富商、外交官、皇族やお姫さま、みんなが欧亜連絡のあの国際寝台列車に憧れてイスタンブールへの旅をしました。文学にも映画にも取り上げられて世界にその名が高いんだけど、
「現実のオリエント・エクスプレスは、過去の栄光の残りかすなんだよ。食堂車もつけないぼろ汽車になり下っている。そうとは知らぬ阿呆が、アガサ・クリスティやグレアム・グリーンの小説に惹かれて時々乗りに行く。その種の物好きと東欧圏の難民だけ相手にしていても、採算採れないからやめてしまうんです。ぼろ汽車の最後を見届けるのも、企画としては面白いかも知れませんが、僕は鉄道に無知な阿呆と同列に見られたくないね。折角だが、乗ってみる気はありません」
「ちがうんです」
と、電話の主が言った。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

「何がちがう？」
「時刻表に記載されてるオリエント・エクスプレスに乗ろうとは言っておりません」
「じゃあ何に乗るんですか」
聞いてみると、この五月下旬、オリエント急行が九十四年の歴史を閉じる日、スイスの旅行社が「郷愁のオリエント急行」なる特別列車を、チューリッヒからイスタンブールまで別に走らせる。
「昔ながらの一等寝台車食堂車を連結して、一九二〇年代そのままの華やかな姿によみがえらせて、客も全世界から募集した百人だけで」
「へえ」
「途中、大きな蒸気機関車にこいつを曳っぱらせたりしてですね」
「ふうん」
「三人分すでに予約を入れてあるのですが、どうしても気が進まないと仰有るなら止むを得ませんが」
「ちょっと待ちなさい、君」
だぼはぜと思われたくないけれど、餌を見て気が変った。
次の日、電話の主の若い編集者が打ち合せにやって来た。名前を名のるのが「砂糖」に聞える。
「行くとして、砂糖君ともう一人は？」
「海苔です。カメラマンです」
「君とカメラマンの海苔と、一体どんな恰好でその列車に乗りこむつもりかね」
「恰好と言いますと？」
「服装ですよ。これは、君たちが考えてるより厄介な旅行かも知れないよ。一九二〇年代の再現

ということになると、ジーパンで晩めしとは行かんかもしれん。車内で正装を要求される可能性がある」

スイスの旅行社へテレックスを打ってもらったら、果して背広では不可、夕食はブラック・タイと返信が来た。面倒な話だが仕方がない、砂糖と海苔はタキシードを用意し、私はその上羽織袴を用意し、かくて指定の五月某日空路チューリッヒへ到着した。

翌朝、時差ぼけの寝ぼけまなこで駅に行ってみると、乗客、報道陣、野次馬、プラットフォームはお祭り騒ぎの大賑わいであった。燕尾服の肩に赤いインコをとまらせた男が、古風な手廻しオルガンでブーカブーカとなつかしのメロディを奏でているのは、一九二〇年代のオリエント急行発車風景再現のつもりらしいが、くたびれた燕尾服の裾にインコの白い糞がくっついていて、うんこしたインコが大男の襟首をかじる。

ニューヨークのCBS、ロンドンのBBC、フランス国営テレビのスタッフに日本のテレビ会社も一社加わって、しきりにこの光景を撮影中である。掲示板に「一〇時一〇分発、臨時列車。ベオグラード、ソフィア、イスタンブール行、特別オリエント・エクスプレス」と出ている。どんな華やかな特別列車かと待っていたら、間もなくのろりのろり後ろ向きで入って来たのは、一見して、道化楽師の燕尾服同様相当くたびれた代物であった。

博物館行きの国際寝台車がブルーの胴体に由緒ある「ワゴン・リー」の金文字を飾っているけれど、その金色文字は剝落しかかっていた。一とかけこそげ落して、記念に財布へしまいこんだ。九時から十時半にかけてこの駅を出るスイス国鉄のほかの列車の方が、ずっと清潔である。

「君の名前がお砂糖だからな。どうも話が甘くてきれいすぎると思ったよ。ずいぶん薄ぎたないねえ」

しかし、ヨーロッパの人々にとっては、明治村をきょうチューリッヒ駅頭に見るような一種特

別の感慨があるらしかった。誰も彼もが、嬉しげになつかしげに笑顔で言葉を交していた。
東洋人の乗客は、首にカメラをたくさんぶら下げた海苔と、砂糖、私の三人しかいない。往年のオリエント急行を曳いたというあご髭禿げ頭の老機関士が一九三三年スイス製の電気機関車を運転する。やがて一同乗り終り、全車輛車齢四十年以上の姥桜エクスプレスは、観衆の見送りをうけて定刻五分おくれの十時十五分、ピーともポーとも言わずにチューリッヒを発車した。
オリエント急行の歴史を書けば、イスタンブールが未だコンスタンチノープルと呼ばれていた時代に溯って長い長い話になるから、私自身の古い記憶だけでいうと、かつて二つのオリエント・エクスプレスがあった。シンプロンのトンネルを抜けてイタリア領を経由する「シンプロン・オリエント・エクスプレス」と、オーストリーのチロル地方を通る「アールベルク・オリエント・エクスプレス」。少年のころ、名前の響きの美しい「シンプロン急行」に憧れていたが、後年実際に乗ったのは「アールベルク」の方である。
「何だ、乗ったことがあるんですか」
と砂糖が言った。
「二十一年前、インスブルックまで、ほんの一部分だが乗った」
「そのころは立派でしたか」
「当時から薄ぎたなかったね。食堂車の窓にすき間風防ぎのねずみ色の毛布がぶら下げてあったよ。その後二系統の運転はやめになり、食堂車もつながなくなって、辛うじて命脈を保っていたのが、今度廃止される時刻表の『オリエント急行』――『ダイレクト・オリエント・エクスプレス』です。現行時刻表に載ってるのはシンプロン越えの奴で、この特別列車が『アールベルク急行』の道を走ってる。分りますか」
列車は美しくないけれど、チューリッヒ湖に沿うて走る沿線の景色は美しかった。ヨットが出

ている。ライラックの花が咲いて、山に雪があって、首に鈴をつけた牛がいて、金色時計の教会の尖塔が見えて、しかし、あんまり見ているとチョコレートの箱のような気がして来る。線路わきのキロ・ポストで時速を計算してみるに、目下一〇五キロ、バアでアペリチーフを飲んでいたら、早くもスイスとオーストリーの国境駅であった。旅券の検査も何もしないけど、機関車がオーストリー国鉄の電気機関車に替る。

昼めしのテーブルにフランス国営テレビのサラが同席した。若いアメリカ娘だが、パリで働いている。父親がノールウエー系、母親がイタリア系、英仏独伊ノールウエーと、五カ国語に不自由がない。海苔と砂糖と私と三人共同で、こちらは二カ国語が怪しい。

「あ、いた」

と、サラが窓外を指さした。

フランス・テレビの雇ったヘリコプターが、谷間の空き地を離陸してオリエント急行を追いかけていた。雪の山々の間を列車にスピードを合せて飛ぶので、空中に静止しているように見える。一度、牧場の上をあまりに低く飛んで、びっくりした牛の群が四方へ逃げ出し、食事中の客を笑わせた。食事といってもイタリアのサラミ、生ハム、フエトチーネに始ってゴーゴンゾラのチーズ、菓子、エスプレッソで終る葡萄酒つきの二時間コースだから、会社の昼めしを十五分ですませているお砂糖は、

「昔のヨーロッパ生活とはこういうもんですかね。映画では知ってたけどなあ」

文化ショックを受けたらしい。食べ終るころには間もなくインスブルック着であった。

ここで大部分の報道陣が下りる。下りてフィルムと原稿を本国へ急送する。空中撮影隊を収容したフランス・テレビ組だけが、イスタンブールまで全線同行する。

インスブルックは、チロルのまん中、山気の澄んだ古いきれいな町だが、二時間四十五分の停

車中、さてすることもないので、市電で町を一と廻りして駅へ戻って来たら、となりのフォームにミュンヘン発ミラノ行のＴＥＥ（欧州国際特急）「メディオラヌム」85列車が、ドイツ国鉄の機関車に曳かれて到着するのが見えた。三分停車で十七時三十分発車。「メディオラヌム」はイタリア古代都市の名前で、さしずめ特急「あすか」号というところだろうが、装備は近代的、性能がよくて、時速一七〇キロ出す。一緒に見ていたレイルファンのドイツ青年が、にやッとして、

「ほんとはあちらの方がよっぽど豪華列車なんだ」

と言った。

「郷愁のオリエント急行」の客車は、フランス製あり英国製あり、ドイツ製イタリア製、第二次大戦前に使っていた中古の寄せ集めである。そのころ汽車の水洗便所などというものは無かったから、台車のはしっこに糞尿がひっかかっていてください。インスブルックを出たらぽつぽつ晩めし用のこしらえをしてなくてはならぬので、私たちも、一九三〇年英国メトロポリタン・キャリエージ社製造の七号車へ帰った。帰る途々、

「郷愁のということは、要するに古くさくてとろいということだな」

私は砂糖に言った。

「気に入りませんか。僕は面白いですがね。こりゃ、やっぱり相当豪華なもんです。興奮するですよ」

「いや、気に入らないわけでもない。面白いさ。しかしデッキのこの鉄板なんか御覧なさい。錆(さび)だらけで、錆落しをしたら穴があきそうだ。横浜岸壁の氷川丸のエンジンに火入れをして、郷愁の太平洋航路と称して走らせているような、多少そういう気がするだけです」

コンパートメントの扉をあけると、私一人の寝室で、床は赤い絨緞、壁板は古風なマホガニー材、花模様を描いた上にニスで艶出しがしてある。洗面器、洗面器の下に小便用のおまる入れ、

大小の鏡、小型の扇風機。ただし扇風機は廻らないし、絨緞はすり切れているし、寄る年波の貴婦人といった趣きがある。スイスの旅行社が差し入れてくれたカーネーションの花活けは代用のサイダー瓶であった。

ヴォルグルという田舎駅にとまって揺れなくなったのをしおに、山間の小鳥の囀りを聞きながら着替えにかかったが、探偵アルキュール・ポアロが乗ったのと同じ造りのヴィクトリア朝風コンパートメントで袴の着つけに苦労しているのは、やはり少しくお芝居のような感じがした。

ヴォルグルを出て、ようやく日が暮れる。シグナルの強い緑の光が車窓に迫って、赤に変ってうしろへ消えて行く。ケタトンタンタン、ケタトンタンタンと、列車はオーストリー領をユーゴの国境へ向って走っていた。夕食会に出る砂糖の恰好は、ホテルのボーイか貸衣装の花婿さん、私は羽織袴、海苔はタキシードの胸に仇討ちよろしく二台のカメラをたすきがけに掛けて、相当珍妙な光景だろうと思うが、こういう時ヨーロッパ人は「オオ」とか「ワァ」とか声を掛けたりしない。興味があっても知らん顔をしている。アメリカ娘のサラだけが、

「これ、何？　これ、どうやって結ぶの？」

と寄って来て、私の袖や袴の紐を引っ張った。

食堂車は二台のプルマン・カーを含む三輛編成で、正装の老若男女それぞれの席に白いナプキンを垂らして、メニューには物々しくイタリア人の料理長ファリチオーラ、主任ブリガッティの署名が入っていて、なるほど半世紀前の栄華の夢かと思うが、私は電気を消して蠟燭の灯で物々しく食事をするのが苦が手である。

「先生は文句ばっかりで、ムードの無い人だなあ。折角乗ったんだからもう少し楽しんで下さいよ」

と砂糖が言った。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co